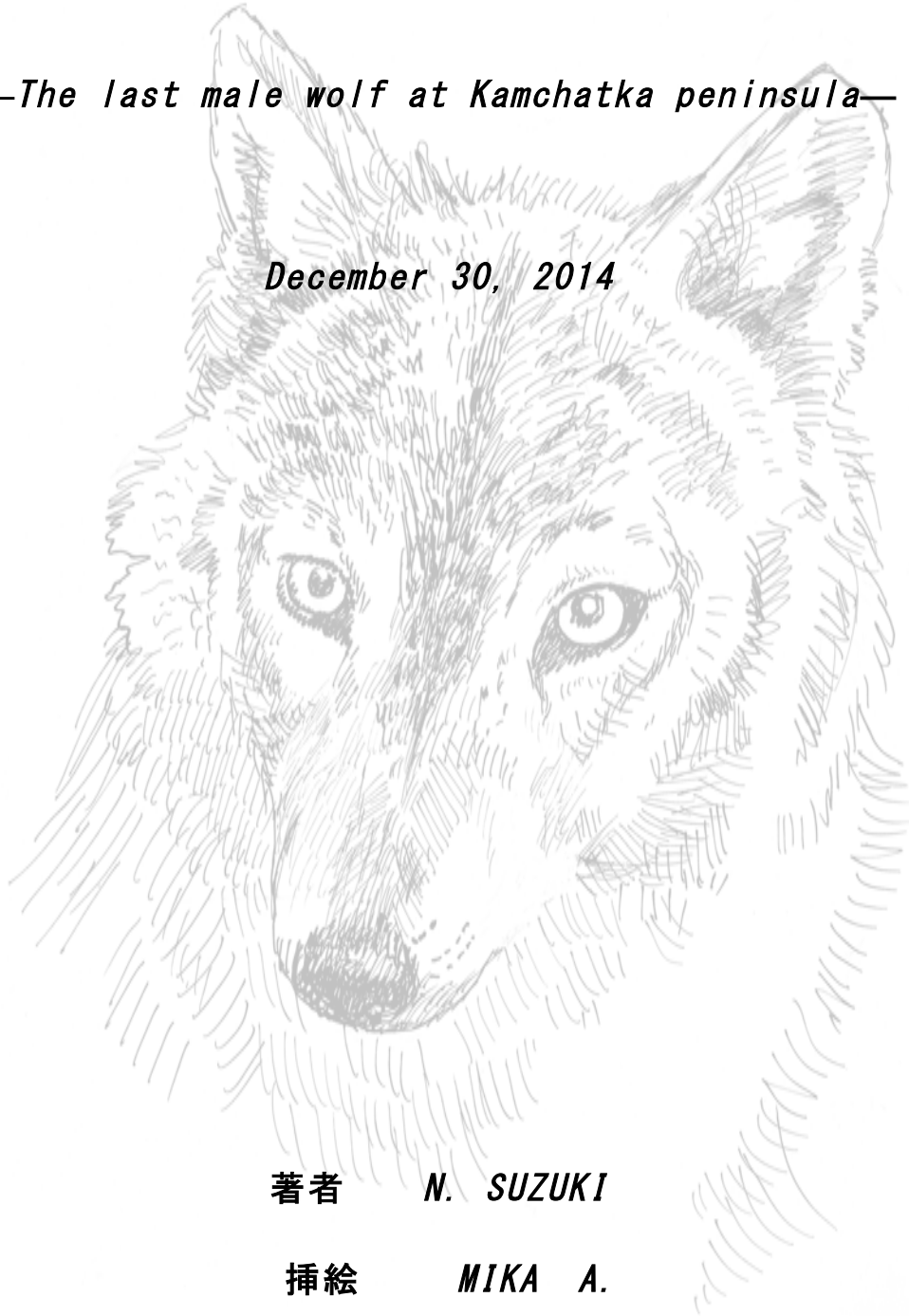


バルチク

—The last male wolf at Kamchatka peninsula—

December 30, 2014



著者 **N. SUZUKI**

挿絵 **MIKA A.**

プロローグ

やわらかな春先の太陽が降り注ぐ。
風が時々吹き抜ける
その度に氷の粒が顔に当たる。
まつげに乗った氷の粒がそこで霜になる。
でも冷たくはない。
バルチクが目を覚ます。
前足に力を入れ、首を伸ばす。
まだ眠そうな目のまま、鼻先を伸ばす。
春の匂いがその鼻をくすぐる。
バルチクは灰色のオオカミ。
ここ極東ロシアのカムチャッカに生れて今2歳。
もう身体は大人だが、気分はいつも少年。
真面目に狩りはしない。のんびり暮らすのが大好きだ。
バルチクに両親はいない。兄弟もいない。つまりは一匹オオカミ。
でも寂しくはない。いや、それはやせ我慢に過ぎない。
本当は両親も弟や妹達にも生きていて欲しかった。
ところが運命の悪戯というべきか、そのすべてがこの世を去った。
あれは1年前の5月、とても悲しい事件が起きた。
北から下りてきた一群のオオカミと父が戦い、そしてまず、その父
が死んだ。
それは灰色オオカミの宿命だったかもしれない。ただ、その後に起
こった悲劇がバルチクをさらに苦しめる。
母は父を盲目的に愛していた。だから、突然起こった夫の死を受け

入れることができなかった。

夫の死を境に、母は食事を止めてしまった。日々衰え、乳飲み子に必要な母乳が出なくなった。

その母はやがて死を迎えた。眠るような死に方だった。その前に弟や妹達が死んでいた。バルチクは独りこの世に残された。

そして今、ここにいる。

春先の情景

バルチクは立ち上がる。四足に力を入れ、力一杯身体を震わす。毛の先に付いた氷の粒が飛び散る。それが太陽の光を受けてキラキラと輝く。でも、それをバルチクは美しいと思わない。ただいつも通り、無意識にやっただけなのだから。

バルチクは北を向く。右手に崖があり、その先はベーリング海が遙か彼方までつづいている。

いつも見慣れている風景。磯辺から波の音も聞こえる。その先の海の上に、氷の塊が浮いている。少しづつ上下に揺れながら、ラッコのように浮かんでいる。

俺のように、暢気なヤツだとバルチクは思う。でも考えてみると、氷の塊は徐々に消えかかっているように見える。ドンドン小さくなっているのだ。

それはそれでいい。バルチクには関係ないことだから。大きくなろうと、小さくなろうと海は今、歩けないところ。カムチャッカの5月。それは冬の終わり。そして輝く春が始まる季節。

バルチクは歩き出す。地面の上が濡れている。その下はまだ凍ったまま。やがてそれも溶け出すだろう。

寝ていた場所から、少し断崖に近づく。高さは30m位だろうか。海鳥が見える。だが、絶え間なく喚き散らす声が煩い。どうして海鳥はあんなに騒ぎつづけるのか、バルチクには理解できない。

海から吹き上がる風で、バルチクの毛並が逆立つ。身体も一瞬、浮き上がったような気もする。

それにも構ってられない。バルチクは歩き方を少し早める。両前足を交差するようにして、北に向かう。

行き先は決めていない。足の向くまま、気の向くままだ。昨日大きなヤマドリの牡を食べたせいも、空腹はまったくない。だから急いで、獲物を探す必要も、さらに狩りを始める必要もない。

ただ、歩く。歩きながら体調を整える。バルチクの目の前で、陸も海も途切れることはない。延々と、無限の彼方につづいている。

だから歩く。歩いていれば、いつかどこかで、面白い事件に出会うことも期待できる。

右手前方に、白い煙が見える。細々と立ち昇り、空の彼方に消えていく。多分、あの煙の下に、妙な生き物がいる筈だ。

バルチクは歩みを緩める。そして止まり、海岸を見下ろす。変な建物が見える。そこから煙が立ち登っている。2本足で歩くヤツがいる。歩き方が遅く、むさ苦しい。

髪はボサボサ、毛皮はボロボロ。大きいヤツも、小さいヤツもいる。だが誰も、頭上のバルチクに気付かない。

興味を失う。そしてまた、静かに落ち着いて北に向かう。

遭 遇

意味もなく北に歩き出して3日になる。途中、雷鳥を捕えて3羽食べた。この類の鳥は余り飛べないので助かる。身体を動かし、頭を少し使えば簡単に捕えられる。

夕方から少し眠った。でも目を覚ますと、夜空に満天の星が輝いている。だから遠くまで物が見える。

地面に横たわったまま、頭を動かす。すると、バルチクの鋭い感性がなにかを捉える。

立ち上がる。そして北西に目を向ける。わずかだが、臭いがする。生臭い、嫌な臭いだ。だが、無視することも見捨てることもできない。

バルチクは北西に向かって歩き出す。それが徐々にスピード上げていく。

手掛かりは臭いだけだ。しかし、その臭いの中にバルチクを呼ぶような声が混じる。気のせいかもしれない。多分、幻聴というヤツだろう。

空の星の輝きが薄くなる。間もなく夜明けがやってくる。だが、バルチクは休まない。休んだら駄目だと誰かが言っている。

走り始めて6時間。あの臭いがきつくなる。このまま真っ直ぐ進んではいけない、と誰かがささやく。その言葉に従い、バルチクは北西から西に進路を変え、走る代わりに歩き出す。

少し乱れていた呼吸が落ち着く。それと同時に、バルチクの頭の中も落ち着いてくる。

血の臭いがする。そのまま近付けば危険だと誰かがささやく。問題

の場所はどうかや低地にある。その背後に崖が見える。バルチクは左手に進路を変え、う回路を使って崖の上に上がる。

深く深呼吸をする。それから徐に断崖の先端に身を移す。

耳を澄まし、目を眼下に向ける。動くものは見えない。だが、自分と同じ動物が雪の残る大地の上に倒れている。

その数は5頭以上。いやもっと多く、10頭になるかもしれない。

そこでバルチクは姿勢を戻す。

北西の背後を見回す。遙か遠くに高い山並みが見える。初めて見る山々が霞んで見える。だが、近くの大地に、怪しい者は見付からない。

それからさらに頭を動かし、北と東と南を見る。慎重にそうしているが、気になるものはやはり見えない。

気を落ち着かせる。次に自分のとるべき行動を頭に浮かべる。危険があるかどうか考え、最後に一つの決断を下す。

—今はやるしかない—

バルチクは足元を確かめながら崖を降りる。それからゆっくりと問題の場所に近づく。

動物の汗と血の臭いが増々きつくなる。それを無視して、バルチクは前に進む。

足元に飛び散った血の塊がある。その脇にオオカミの尻尾や耳の破片がある。懐かしい臭いと、気味の悪い臭いがバルチクの鼻を塞ぐ。一番手前で倒れているオオカミに近づく。首を下げ、相手の胸に鼻を付ける。

冷たい。呼吸もしていない。首の下に食い千切られた跡がある。

—これは駄目だ—

その死体を避けながら、バルチクは前に進む。辺り一帯の上に広がるザラメになり掛けた雪が、泥や血に染まっている。

2 頭目のオオカミの前でバルチクは同じ動作を繰り返す。結果は変わらない。ボロの塊のような物体がそこに転がっているだけだ。バルチクはまた、一步先に進む。

そこには 1 頭、身体の大きな牡オオカミと比較的小型のオオカミが横たわっている。しかし、首の横を噛み切られている大型の方は、最初から息のしない死体だと分かる。

そこから一寸身体的位置を変え、バルチクは小型のオオカミに鼻を付ける。すると、体温を失い掛けた身体からわずかな温もりが伝わり、かすかな心臓の音もしてくるようだ。

—これは生き返るかもしれない！—

バルチクはフット息を吐き出す。それからまた周囲を見渡し、他に生きている者がいないかどうか確かめる。

—多分、この 1 頭だけが生き残ったのだろう—

そう思いながら、バルチクは次にすべきことを考えた。どこまで運ぶか、どこが安全か。さらに自分の力の限界と、持続能力について考えを巡らせた。

—よし、ここから戻った 1 キロ先の横穴にとりあえず運び込もう—
決断は早かった。しかしそこに問題があった。

目の前に横たわるオオカミの重さは多分、25 キロは超えていない。これがただの肉の塊なら、そのまま真ん中を啜って簡単に運ぶことができる。ただそれでは、背中に深い傷跡が残る。

だからといって、一番運びやすい首などを啜えることもできない。それでは今生きている者を殺してしまう。

バルチクはそこで戸惑う。最適な運搬方法が見当たらない。考えが
出発点に戻ってしまう。

バルチクは一旦、遠方に目を向ける。ぼんやりと辺りを見回す。周
囲の状況は何一つ変わってはいない。

そこでもう一度、足元に目を向ける。

—仕方ない。ここは次善の策で切り抜けよう—

時間が静かに流れる。なにかしら小鳥のさえずる音だけが聞こえる。
後は自分の足元から出る音ばかりだ。

1時間ほど経った。横穴のあるそこはあの悲惨な光景が残るところ
から約1キロ。南に向かい、海岸が間近になった窪地にある。

出入り口の大きさは直径にして約70センチ。奥行き3メートルの
ところに少し広い空間がある。

バルチクは口に咥えて運んだ相手を、その空間に横たえる。流石に
息が苦しい。首も疲れ切っているようだ。でも何故か、バルチクの
胸に満足感がある。それはまた、不思議な充実感へと変わっていく。

レナ

バルチクは首を伸ばし、相手の血と泥で荒れ果てしまった全身の毛
を繕う。泥はどうにか落ちていく。しかし、毛の底まで浸みこんだ
血の方はなかなか落ちない。そればかりか、バルチクの舌の温もり
のせいか、血の臭いが辺りに染み出る。

部屋は狭い。空気も流れない。その分だけ、腐った血に臭いが充満
するのを防げない。

しばらくすると、バルチクは巣穴を出る。そこから一番近い場所に出る
清水を飲みに出掛ける。急に喉一杯の渴きを覚えたからだ。

清水は冷たくて気持ちがいい。ガブガブと飲みまくる。ついでに顔や手足も洗い、あの嫌な臭いも消そうとする。だがこれは上手くいかない。

目に見えるものは水で流せる。それが臭いになると、なかなか難しい。しかもその臭いというヤツは毛の下の皮膚の中にも染み付いてしまうようだ。

—仕方ない。やがて時間が経てばこの臭いも消えてしまうさ—
そう思いながら最後に一つ、忘れていたことに気が付く。

深く鼻先を清水に突っ込み、それを口一杯になるまで吸い込む。それから、元の場所に引き返す。倒れたままの相手はピクリとも動かない。

バルチクは両前足の膝を曲げる。それから横向きに寝ている相手の鼻に自分の鼻先を触れ、反応がないのを確かめてから、その唇に一滴一滴清水を流し込む。

すると、眠ったままの相手の舌が動き、時々ゴクンと口の中の水を飲み込む。

—これいい。これなら多分助かる筈だ！—

バルチクに期待が生れる。感動も次第に高まる。

黙って見下ろす。心なしか、呼吸が少しづつ早まり、心臓から小さい音が規則正しく聞こえるように思える。それを確かめ、バルチクは巣穴を出る。

大きく一つ背伸びする。その途端に大きな欠伸もでてしまう。

周囲に広く目を配る。地面を歩くような者はなにもいない。小鳥の平和な囁りが聞こえる。姿は見えない。ただ遠く離れた先に、ベールリングの海が見える。

疲れを覚え、岩に上がって仮眠に入る。やがてまた、満天の星が輝く時刻。その下で頭を抱えて丸くなったバルチクが眠っている。

いつかしら、目が覚める。身体も寒さを感じている。身体は眠る前より疲れているようだ。でも気分は爽快。立ち上がり、再び巣穴の奥に入り込む。

相手の眼は心なしか開いている。それにまず鼻先が小さく左右に動き、ゆっくりと口もなにかを言っている。

「有難う！」

バルチクの耳にはそんな言葉が聞こえてくる。

「どこか痛みはないかい？」

バルチクも言葉を返す。だが相手はまた、深い眠りに落ちていく。時間が流れる。夜が朝に変わり、朝は夕方へと姿を変える。その時間、バルチクは相手の脇に寝そべる。少しでも相手の身体を温めてやろう、バルチクはじっとしている。そして自分も眠りに落ちる。しばらくすると、片方の目が開く。その目で自分の周りを眺め、すぐ脇に眠るバルチクの身体に鼻先でそっと触れる。

何故か、懐かしい臭いがする。父親でなく、まるで仲良くしていた兄弟の臭い。不思議なことに、あの悲劇の世界が遠い過去の出来事のように思える。

やがてバルチクも目を覚ます。するとすでに目覚めていた相手の呟くような声が聴こえる。

「あなた、本当にどうも有難う。」

「ほう、それはよかった。」

「ところで私の家族はどうになりました。皆死んでしまったのですか？」

「そう、残念だけれど間違いなく全員死んでいる筈だよ」

「じゃ、お願いがあります。私をどうかあなたの傍に置いてください。」

バルチクはその願いに直接口で答えることはなかった。その代わり、

「俺はバルチク。もうここから少し南の方のところで長く独りで生きてきた。まだすっかり大人になっていないけれど、……」
と言って、遠慮がちに微笑んだ。それが偶然の出来事から始まった一つのカップルの誕生の由来。その相手は自分の名前はレナだと言った。

黒いオオカミ

穴倉に入って1週間、ようやく元気を取り戻した相手を持って、バルチクも外に出た。その瞬間、相手は声も出さず顔を背け、頭を隠した。

バルチクは最初、それがなにを意味するのか分からなかったが、すぐその理由が分かった。

「太陽が眩しい？」

そう聞くと、相手は尾を左右に振りながら、イエスと答える。

—そうか、そうだろうなあ、……—

と頷くバルチク。が、次の瞬間、バルチクは見た。細くて痩せた身体全体を覆う真黒な毛並。こちらを振り向いた途端に覗く黄金色の両目。その両目の奥深く、宇宙を見詰めるような透明感。

—これがあのボロ屑のように倒れていたオオカミの娘なのか！—
バルチクの驚きは測り知れない。一瞬、相手から腰が引ける。そうしながら、もう一度相手をよく見る。

そこにレナという牝の若いオオカミがいた。すでに毛並は輝きを取り戻し、その両目がしっかりと新しい夫バルチクを見ている。

バルチクは姿勢を正した。腰を下ろし、両前足をきちんと揃えた。首を伸ばし、顎を引いた。

「レナ、もう一度言う。俺はバルチク。今2歳になったばかりの牡オオカミ。君と同じように、家族は皆死んでもう誰もいない。夫となって君と生きる。信頼してもらえるだろうか？」

するとレナはしなやかに身体を動かし、バルチクの目の前に座りながら、誓いを立てた。

「バルチク、これから私は貴方をこう呼ばせてもらいます。私は貴方と共に生き、貴方の子供を育て、貴方と共に死んで逝きます。愛と信頼のすべてを捧げて、貴方と生きる喜びに身を委ねます」

そこまで言い終わると、レナは2、3歩バルチクに近付き、相手の顎の下に自分の頭と首をすっきり預けた。

バルチクは感動した。胸が高鳴り、熱い血が全身を駆け巡る。その時、もう自分の感動を抑えることはできない。

バルチクは思わず声を張り上げる。オオカミであることの喜び。レナとこうして出会ったことの感激。そのすべてを雄叫びに込める。その雄叫びが少し収まるのを待ち、レナも自分の叫びを合わせる。ロシアの大地で生れたことを、カムチャッカの地で夫バルチクに出会えたことを神様に感謝しながら、密やかに優しくバルチクの叫びに自分を重ねる。

「バルチク」

「レナ」

黒色の美しい毛並。黄金色に輝くまなこ。

—他になにもいない—

ふたりは同じ思いを噛みしめながら、夕日に向かって肩を並べる。

遙かなる旅へ

春から夏、夏から秋へと季節が変わる。その間に、レナの姿は益々美しく変わる。それを横目に、バルチクも悪戯好きの少年から、気が付くと牡の大人に変わってきたようだ。

風格が生れる。身体も一回り大きくなり、足腰にしっかりとした軸もできている。カムチャッカの牡オオカミ、それがバルチクの代名詞になりつつある。

バルチクが先を歩く。その横か少し後ろをレナがつづく。そんな時、二人は余り話をしない。しなくても、二人の心は通い合う。目に見えない熱い絆が二人を繋ぐ。

そんなある日、バルチクからレナに声が掛かる。

「冬になる前に、遠く旅に出よう。どこまで私達のテリトリーにできるか。何処から先は避けるか。それを今の内に君と一緒に決めておこう。そうすれば、長い冬の間も、私達は互いに話が出来るだろう」

「イエス サー。了解しました。貴方の心のままに」

そうふざけて答えるレナの眼が金色に輝く。バルチクは微笑む。その身体に自分をぶつけ、レナの身体が宙に舞う。

バルチクは考えている。陸と海の境をしっかりと頭に叩き込むことを。その境目から陸地の中央まではどの位の距離があるのか。カリブーの群は今どこにいて、ヘラジカはいるのかいないのか。

それからカムチャッカの大地を歩き回る赤毛の大熊の様子と、オオカミの他の群の数や、大まかな生息地も知っておくべきだろう。

バルチクは再び北に向かう。その先百キロ、そこをまず最初のゴールとする。その間、幾つもの川を渡る。浅瀬を探し、ついでに川を遡上するサケを口に咥えながら次の岸辺に辿り着く。

そこで一旦サケを口から放し、前足で抑えながら腹に噛み付く。これが実に美味しい。

「これ美味しいだろう？」

そうバルチクが聞いても、レナは微笑んだまま答えない。

—そんなこと、聞くまでもないわ—

というのがレナの返事。

二人は先を急ぐ。やがて出発地点から百キロ。そこでバルチクは向きを変え、ベーリング海を背にして東に向かう。

海から離れるに従い、木の丈がどんどん伸びる。海岸から 25 キロ、そこには落葉樹の林が広がる。木の高さは精々10メートル。しかし海岸から百キロも入ると、木々の高さも 20 メートルは優に超える。

森林の中に入り、バルチクは目の前の高い木を見上げる。

「たいしたものだ！」

バルチクは声を挙げる。大きさや高さもそうだが、その木の根の張り方を想像すると、バルチクは感動の念を禁じえない。

「バルチク、私の故郷もこんなだったと思うわ」

レナも今は喜んでいる。失って別れた両親や兄弟姉妹のことを思い出しているのかもしれない。

さらに先を急ぐ。前方の右手、そこに高い山脈が姿をみせる。距離は分からない。多分、百キロから二百キロ。すでに峰々は真っ白な新雪を被り、厳かに二人のオオカミを見下ろしているようだ。

「山は素晴らしいわ。どこかに女神様がいるのかな？」

レナの独り言が聞こえる。バルチクはそれに答えようと思わない。どう考えてみても、答える術をバルイクは思い付かない。

出発して約2週間、バルチクはレナを促して、帰路に付く。長くて短い、短くて長いとも思える二人にとって初めての旅。

冬が間近に迫ってきた。地面が凍り、雪も積もり始める。長くて厳しいばかりの冬だが、ふたりのオオカミに怯えはない。

カリブー狩り

冬が来た。雪が降り積もる。その下で大地も奥深くまで凍てつく。小鳥の声も聞こえない。海も凍る。そうすると、海鳥もどこかに飛び去る。

海が凍ると、大地と海の境目がなくなる。その上を猛烈な嵐が吹き荒れる。遥かに遠く、シベリヤの奥地にできた寒気団が南に張り出し、オホーツク海もベーリング海も平らな白亜の大地に変わっていく。

その代わりに、小型の動物達が雪の中から姿を現す。オコジョ、クロテン、カンジキウサギ、それにあの獰猛なグズリも目に付く。

こんな小さな動物達も、夏は夏で生きている。ただ、大地に広がる草花が生い茂ると、風の悪戯と草木の陰で彼等の姿は見えづらい。

だが、大地がこうして雪と氷で覆われた時、彼等は昼夜、姿を現す。彼等がチョロチョロ動く姿も直接見られる。それに、雪や氷は地上に転がる石と同時に、草花と落葉と川の匂いまで押し包む。それが最後の決め手になる。

臭い、それはオオカミにとって最大の手掛かり。陸上に棲むすべての動物を相手にしても、オオカミに敵うものなどいる筈もない。

だがこの臭いと嗅覚の面でも、たった一種、オオカミの敵がいる。それがイタチの仲間で一番大きいグズリのヤツだ。

オオカミがカリブーなどの大物を倒したとき、どうしても一度だけでは食べ切れない。だから一度に食べるだけ食べると2日、3日と同じ場所に放置する。すると何処からか、あのグズリが荒々しい鼻息と、鼻を鳴らしながらやってくるのだ。

普段なら、オオカミはアイツを避ける。負けるからではない。勝つて、相手を殺したところで、オオカミの身体に傷が残る。それがやがて化膿し、手足が使えなくなる者も出るのが困る。

グズリの鼻はいい。激しい嵐の中でも、彼等は死肉や腐肉のある場所を遠くから見付けてしまう。それから一直線に肉塊へ向かい、その傍にオオカミがいても構わない。

—肉がある。ここに美味そうな死肉がある！—

グズリの頭は単細胞で出来ている。だからいつ何処でも一直線に近付いてくる。そこに獲物を捕まえた本人がいようと、いまいと構わない。勝手に唸りながら死肉に飛び付く。

相手の身体の2倍も3倍もあるオオカミでさえ、奴らを簡単に追い払うことなどできない。グズリに逃げるとい言葉がないからだ。

—グズリは死を恐れない。生きるために死肉を貪るのではない。死

肉を貪るために生きているだけなのだ—

バルチクにそう教えてくれたのはあの亡き父親だった。

「レナ、狩りに出掛けよう」

「ハイ、バルチク。でも今日の狩りはなに？」

「少し遠くに出掛けてカリブーを狙おう」

「でも、カリブーはこの秋、沢山南に下がって行ったわ」

「それは勿論知っている。だが、大きな集団に遅れてしまった家族がまだこの近くを通る筈だ。それには多分、理由があって、誰かがひどい怪我をしているか、重い病気に掛かっている筈だよ」

「そう、でも病気のカリブーを食べても私達大丈夫？」

「そりゃ、問題ないよ。カリブーの病気はオオカミに移らない。それに、その病気が伝染病なら、他のカリブーも同じ病気で死んでしまう。だからオオカミとカリブーの双方にとって、間引きこそ必要なんだよ」

「じゃ、分かったわ。すぐ出掛けましょう」

バルチクはそこで歩き出す。また北へ向かい、雪の少ない海岸線に沿って、黙々と歩きつづける。

狩りをする上で、オオカミの武器は持久力。歩くだけなら二日でも三日でも歩き続けられる。一気に歩ける距離は百キロ。ゆっくり歩きながら獲物を探し、大きな相手の疲れを待つ。

相手が目の前に来たら、皆で一気に駆け寄る。仲間の先頭が疲れたら、次々に先頭を変える。そして最後の時を待つ。

歩き出して2時間、バルチクは断崖の陰に窪地を見付ける。

「レナ、あそこで待とう」

レナの返事を聞く前に、バルチクは断崖を登り始める。そして窪地

に着くと、海岸を見下ろせる場所に腰を下ろす。

「レナ、少し眠って休もう。我々オオカミは眠っていても、鼻と耳は生きている。だから、今日の獲物のカリブーなら、決して見逃す筈もないから、心配する必要もない。さあ、ここに来て一緒に休もう」

雪が少し激しくなった。風も出てきた。窪地で隣り合い、丸くなって眠るふたりの身体に、その雪が降り積もる。雪交じりの風の音が辺りを包む。

目をつぶって眠りに入る直前、レナが小声で呟いている。

—この瞬間が私は大好き—

長い冬の終わり

北緯 60 度の線上に近いカムチャッカは冬、長い夜がつづく。日中、太陽が南の空の端をわずかに横切る時間にいても、一番短いときは一日 6 時間。だから、昼の正午でさえ、晩秋の夕暮れを思い浮かべる。

それに、ここカムチャッカの北部に高い山や山脈がない。そうすると、西のオホーツク海を走り抜けた寒風はさらに勢いを増して、遙か彼方のベーリング海へと吹き抜ける。だから寒い。だから、森林も余り育たないのだ。

それでも、レナは困らない。傍にはいつもバルチクがいて、食べ物に不足する日もまったくない。

レナの目から見て、バルチクは頼もしい。逞しくて、優しく、立派なカムチャッカの牡オオカミだと思う。

レナは今、自分が牝のオオカミに産まれたことに感謝している。多分、まだ若い牝のオオカミだから救われた、と思うこともある。でもこれだけはバルチクに聞けない。聞いたら怒られる。本気になって、。。。。。

レナは眠った振りをしながら薄目を開ける。スヤスヤ隣で眠るバルチクを見る。鼻に鼻をくっ付けたい。耳も一寸噛んでみたい。でもそれは頭の中ですること。バルチクの大らかな眠りも壊したくないから。

厳冬期の終わり、3月の半ばを過ぎる頃、カムチャッカの北の大地を猛烈な嵐が吹き抜けた。それを合図に、空気に少しだけ湿り気が混じり、呼吸がその分楽になる。

厳冬期、気温は毎日-20度以下に落ちてしまう。そうすると、空気や空から舞い落ちる雪の中で湿気がすべて氷の粒に変わり、動物は皆、極端に乾いた空気を吸うことになる。

これは辛い。鼻は奥まで乾き、口の中までカラカラになる。その苦しさが今、どうやら終わろうとしているようだ。

「バルチク、私なんだかおかしい？」

「。。。。？」

「あのね、お腹の下の方が気になるの。それにね、気持ちもなんだか落ち着かないの。病気かしら？」

そう聞くと、バルチクが近くからじっとレナを眺める。そして微笑みながら言った。

「レナ、多分君は大丈夫だ。女の子が大人になる時期が来ていると思うよ。確かなことはいえないけどね」

「。。。。！？」

それから 10 日後、レナがまたバルチクに甘えて言った。

「バルチク、私お尻から血を流している。なんだか気持ちがわるいは、どうしよう？」

「まあ、あと 2、3 日待ちなさい。そうしたら私達も本当の夫婦になれる訳さ」

「……………」

レナにはその言葉の意味が分からない。でも、それでいい。

—バルチクは私の救い主。愛しい相手だけれど、生きた神様。貴方の言うことはすべて正しいの。だから、私もバルチクと夫婦になりたいわ—

暗闇の長かった冬が終わる。その後に、柔らかな春に兆しが見えて来る。

初めての子供

妊娠 1 カ月半、レナのお腹が大きい。そのためか、レナを後ろ足が余り上がらなくなった。それに連れて、残雪や湿った土にレナの足跡が付く時、地面を自分の足の爪で引きずるような筋が見える。

「レナ、歩いて大丈夫かい？」

バルチクは気になる。でも、レナは気にしない。

「大丈夫、赤ちゃんがお腹で騒ぎ出しているわ」

それならいいが、とバルチクも思う。思いながら、歩き出すと遅れがちになるレナの身体を気遣っている。

5 月、カムチャッカにもようやく本格的な春が訪れる。海の氷が割れ、流氷となって南下する。

潮騒が聞こえ始める。無数の渡り鳥もやってくる。カリブーは北のシベリヤに向かい、ヘラジカは沼地で水草を食む。

冬眠から覚めたヒグマの足跡が近くを通り過ぎる。まだ直接出会っていないが、危険な臭いがバルチクは嗅ぎ出している。

—今はまだいいが、これから始まる出産直後の跡始末が問題だ。あれはとても臭う。血の臭いもきつい。レナにいつか言っておこう—
5月20日、そのレナに子供が産まれる。産室を覗くと、少し弱った姿でレナが教えてくれた。

「貴方、子供は3頭。みんな元気、大丈夫」

「そうかい、それはよかった。ところで、子供達のクリーニングはどうした？」

「もうしっかり終わっているわ。みんな私のお腹の中に納まっている」

「そうかい、君も疲れたろう。私は外で見張っているから、今の内に休みなさい」

「有難う、そうするわ。今3頭揃って私のオッパイ吸っている。何か一寸変な気持だけれど、子供達の甘い匂いとチューチューという吸引音が私に幸せを届けてくれるの。バルチク、私嬉しい！」

バルチクはその言葉を聞いている。聞きながら、自分もまた感動の渦に囚われている。

—さて、これからが本番だ。腹を空かせたヒグマやグズリなど、来なければいいのだが、・・・・—

バルチクは立ち上がる。ふと後ろを振り返り、巣穴の奥に目を向ける。でもそこからは何も見えない。何も聞こえない。でもそこにレナがいて、3頭の子供達が間違いなくいるのだ。

半径にして 500 メートル、直径にすれば約 1 キロ。レナの産室を基点にバルチクはパトロールを始める。

雪や氷が解けた後だから、地面はやはり濡れている。しかしそれも間もなく、乾いた世界に変わってしまう。それから、新たな難題が始まる。

—大風が吹かなければいいが—

一旦乾き始めた大地はまず、枯草と乾いたコケ類に覆われる。その上で大風が木と木の太い枝や幹をすり合わせると、火の粉が大地に舞い降り、やがて森林の火災が始まってしまう。

これが実に怖い。瞬時に大きな火の粉が上がる。風の向きも急に変わる。そるとどうなる。逃げ出そうとして逃げ切れず、多くの動物が焼け焦げる。

バルチクにはまだ、たった一度の経験しかない。しかし、あれは実に怖い。オオカミの小さな子供なら、まず心臓が止まり掛ける。顔や鼻に熱が刺さる。その怖さに、バルチクの兄弟の一人が死んでいる。

焼け死んだのではない。窒息したのでもない。バルチクの父が口に啞えて巣穴から無事運び去ったのに、アイツは途中で死んでいたのだ。

バルチクは今、自然の神に願いたい。どうか、あんな大火災がここしばらくの間ありませんようにと。

バルチクの歩き先で、ヤマドリの番が見える。一羽が座り込み、その周りを大きく鋭くもう一羽が鳴きながら走り回っている。

—アイツ等も繁殖期なんだな。まあここは、そっとしておこう—
バルチクは止まらない。そのままの速さで、先に向かう。

こうして春は息づく時。カムチャッカで華やかな時代が始まる時。すべての生命が輝くように蘇る時期なのだ。

グズリ襲来

出産後3週間、レナは普段の元気を取り戻した。それと同時に、子供達がチョロチョロ動き出し、巣穴の入り口まで這い出してくる。まあ、それはそれでバルチクは嬉しい。自分の子供とは、こんなに愛しいものかと自分で驚く。ただ、そこに落とし穴がる。

巣穴の入り口で子供達が泣き叫ぶ。鼻にかかった声が辺りに響く。それと一緒に、子供達の乳臭い匂いが風に乗って広がる。それはまさに、

——一番美味しい餌がここにいるわ——

と周囲に教えるようなものだ。

これには困る。だからといって、こんな小さい子供達を父親だからといって怒れない。怒れば後で、気の小さいオオカミになりそうな気がする。

「レナ、これは困ったことだよ」

「そうね、分かったわ。皆を優しく追い戻し、巣穴から出ないように言っとくわ」

「よろしく頼むよ、レナ。こんな幸せが壊されないようにな」

「OK, 任せて。大丈夫、私が上手くやるから」

言葉通り、レナが3頭の子供を巣穴に戻す。しかし、それで話が終わるとは思えない。

しばらく続いていた北風が南に変わる。温もりが一気に大地を覆う。

草も木も、どんどん日毎に芽を大きくしている。

夕暮れ、バルチクは見事な夕日を楽しむ。周囲の丘や川が紅に染まる。紅はやがて金色に変わり、長く尾を引きながら暗闇に向かう。レナは出てこない。バルチクは眠気に負ける。耳の感覚だけを残し、闇の中で大地に横たわる。暖かくなったから、身体は丸めない。三日月が東の空に現れる。風がなく、海鳴りも聞こえない。すべてが静寂の中で夜が深ける。

よく見ると、バルチクの耳が小刻みに動いている。でも、まだ目を覚まさない。まだ夢の中にいるようで、耳の告げる言葉にバルチクは気付かない。

巣穴から北に 80 メートル。何物かがこちらに向かって進んでくる。歩くより早く、走るよりも少し遅い。

バルチク鼻が警報を鳴らす。バルチクは飛び起きる。首を前方に伸ばし、相手の本性を瞬時に捉える。

—グズリ、グズリだ！—

バルチクは駆け出す。全力で前方に飛び出す。距離が一気に縮む。そして二匹が擦れ違う。

バルチクは急に止まり、跳ね戻って相手の尻尾に噛み付く。それと同時に、グズリの上半身もこちらを向く。その一瞬、口に啜えた相手の尾を力一杯、後方に投げ上げる。

グズリの毛が暗い紅色に見える。それにグズリの両目が空中で金色に輝く。バルチクはその影を地上から追う。そして相手の着地直前、再びグズリのふさふさした尾に噛み付く。

相手は悲鳴を挙げない。怒り狂う唸り声がバルチクの鼻や口や目に張り付く。それでもバルチクは離さない。もう一度空中に持ち上げ、

右手に見えた岩の角にそいつを叩き付ける。
ぐしゃ、という嫌な音に合わせて、グズリの身体から力が抜ける。
多分、相手はそこで死んだ筈だ。
バルチクは胸を大きく膨らませ、一気に息を吐き捨てる。心臓が高鳴る。荒い呼吸がつづく。
—これでもう大丈夫だ！—
バルチクの両肩からも力が抜ける。
—これをレナに見せてはいけない。血の臭いも消してしまおう—
そう思うと同時に、バルチクはまだ温もりの残る死体を啜え直し、海岸脇に切り立つ、鋭い断崖へと向かう。
晴れた空で、無数の星と三日月が仲良く輝やく。こうしてカムチャツカの大地に元の静けさが戻る。何事もなく、辺りの静寂がバルチクの姿を包む。

ヘラジカとの戦い

7月、レナの子供達が生後2カ月を迎える。それを機会に、ある日バルチクは一つの決断を下す。

「レナ、子供達をあの丘の上まで連れ出そう。そろそろこの巣穴の周囲がどうなっているか、皆に教えてやろう」

「そう、それは楽しいわ。さあ、皆出ていらっしやい」

レナは嬉しそうだ。子供達を呼ぶ声に張りがある。
バルチクがゆっくりと先頭を歩く。そのすぐ後をレナが追う。子供達は皆元気だ。足元もどうやらしっかりし始め、レナの後から付いてくる。

巢穴から左手前方に小高い丘がある。バルチクはそこに向かう。天気は今日も晴れている。穏やかな風が鼻をくすぐる。小鳥のさえずりが空に響く。

地面に這うコケのような草から可憐な花が顔を出す。とても小さい花々だが、小さいから可愛いとも言える。

巢穴から目的の場所まで、おおよそ 300 メートル。斜面を登りながら、バルチクは振り返る。レナの姿や子供達の様子が気になる。丘の上に出る。突然、視界が一杯に広がる。右手下方にベーリングの海が見える。遠くにわずかなうねり、海岸線に白波が見えている。カムチャッカののどかな夏がそこにある。

「お母さん、あれは何？」

誰かが甘えた声で聞いている。

「あれは海、ベーリング海というのよ」

すると、その隣からも声がする。

「お母さん、あそこになにか隠れているよ」

「そう、何処。ああ、あれはね。雷鳥のヒナ。やはり今年産まれたのよ」

「そうなんだ。でも、チョコチョコ動き回って可愛いね！」

丘の上から眺めると、確かに雷鳥のヒナが数羽、高山植物の下に潜って動いている。

「よし、アイツ等を脅してやろう」

そう叫ぶと同時に、男の子が母親の足元から飛び出していく。

「危ない、止めなさい！」

レナの声が辺りに響く。しかし、今度は後のふたりを加えて、3頭一緒に飛び出していく。

「まあ、いいだろう。私がここで見張っているから」

「そう、・・・・・・・・？」

レナはどうやらバルチクの言葉に納得していない。それでも、心配そうに子供達の様子をバルチクの脇で眺めている。

丘の先端が少し高い。そのせいか、丘のすぐ下がよく見えない。その方向に子供達が雷鳥のヒナを追い掛けていく。

—雷鳥の親はどこだ？—

そう思いつつ、バルチクも丘の先端に移動する。たいした距離ではない。だから、心配なんか一つもない。そう思った途端、バルチクの胸が高鳴る。

子供達の向かう先に少し大きめの沼がある。その沼に入り込んで、ヘラジカの母子が今まさに、水草を食べているのだ。

雷鳥のヒナを見失ったのか、3頭の子供達はその沼の脇で立ち止まる。そして悲しいかな、ヘラジカの母子に気付いてしまう。

—オイ、戻れ—

バルチクは叫びたい。がそれより早く、ヘラジカの母親が子供達を見付けている。一瞬の静止。それから始まる怒涛のような嵐。

ヘラジカの足が動く。普段なら見過ごすことであっても、自分の幼ない子供が傍にいれば、母親は誰でも過敏になる。

ヘラジカ特有の足さばき。2段クッションの少しゆっくりそうに見える姿で、ヘラジカが子供達に向かっている。

荒々しい鼻息が聞こえる。全身で怒りを現し、重い戦車のように前に進む。

「危ない、貴方！」

レナの叫び声を聞くまでもなく、バルチクの身体が宙に舞う。だが、

バルチクは利口だ。向かう先は母親でない。沼の中でまだおろおろしているヘラジカの子供の方を狙っている。

バルチクは早い。その身体が今さらに高く宙に飛び、一気にザブンと沼に落ちる。

ヘラジカの母親は子供達の目前に迫る。だが、突然背後で起こった水音に驚き、急ブレーキを掛けて立ち止まる。

3頭の子供達が硬直している。動くことも逃げ出すこともできない。しかしそれを無視して、ヘラジカの母親は後ろを振り向き、バルチクの姿を見付けて、また走り出す。

バルチクは泳ぎながらヘラジカの子供に近寄る。それからレナに向かって、大声で怒鳴っている。いや、その声は誰も聞いていない。例外は唯ひとり。それがレナだ。

レナが走る。すぐ子供達に辿り着く。それから小声で皆に伝える。—さあ、付いておいで。急いで巣穴に戻るのよ—

その声に子供達の身体から呪文が解ける。そして皆、レナを追って自分達の巣穴の方角に消えていく。

—これでよかった！—

バルチクは泳ぎながら身体の緊張を解き放つ。ヘラジカ的位置を確かめ、反対の方向へ泳ぎ去る。その背中を目をらんらんと光らせたヘラジカが睨み付けている。

戦いは終わった。沼の水が元の静かさを取り戻す。ヘラジカの親子が再び寄り添い、バルチクも巣穴に戻る。

その時間は短かったのかもしれない。しかしもし、バルチクの判断が悪く、動き出す瞬間が遅れていたら、幼い子供の命が失われることも十分あった筈だ。

巢穴に戻ったバルチクはその時、なにも言わない。素振りにも出さない。その姿を振り返り、ただ一言、レナが言った。

「貴方、有難う。貴方のお蔭で皆助かったわ、・・・・・・・・！」

子供達の初体験

8月後半、子供達が生後4カ月目を迎える。その頃になると、オオカミの子供達は遊び盛りで、悪戯が絶えない。喧嘩もするし、すぐ遠くへ行こうとしてしまう。

レナはそれが心配でたまらない。なにかあったら怖いから、止めさせたいけどそれが出来ない。

「バルチク、助けて」

と何度も言うが、相手は笑っているばかりで、子供達を怒ろうとしない。ただ黙って、子供達の様子を見守っている。そんなある日、バルチクが珍しく掛け声を掛ける。

「よし、今日は皆で狩りに出掛ける。行くぞ、・・・・・・・・」

子供達は遊びを止める。ポカーンと口を開け、父親の言葉が理解できない。

「さあ、お父さんの言う通りにしましょう。皆で狩りをして、楽しく一緒に食べましょう」

バルチクの掛け声につづいて、レナが子供達を促す。

「よし、狩りだ、狩りだ」

「でもお母さん、狩りってなあに？」

そう聞いているのはひとり娘の可愛いグリンカ。

「グリンカ、まあそれはいいから、お父さんの後ろに付いていくの

よ」

「Yes sir、じゃあみんな行こう」

バルチクを先頭に、オオカミ一家は西に向かう。どこまで行くのか、レナにも分からない。でも我が子の成長している姿を後ろから見ていて、レナは喜びを隠せない。

—こんなに幸せでいいのだろうか？—

レナは半分、嘘のような気もする。だけど確かに、バルチクを囲むようにして飛び跳ねる子供達の姿は、他の言葉で表しようがないとレナは思う。

しばらくして、一行は浅瀬の川に辿り着く。水はもう温かくはない。そのかわり、浅い川の流れはどこまでも透明で、すべてが見える。

「わあ、お魚だ」

「あっちにもいるぞ」

「オイ、こっちもだ」

「オイ、子供達、これはサケという魚だ。今、自分の子供を産みにベーリング海からここまで登って来たんだ。さあ、思う存分飛び掛かれ。そして自分で捕まえた分は自分で食べていいぞ」

「わあ、やったー！」

先頭がまず、岸から水の中に飛び込む。それにつづいて、他の2頭も思い切って川の流れに入り込む。

飛沫が上がる。折り重なって遡上するサケの群が隊列を乱す。どれかが空中に飛び跳ねる。別のヤツは一瞬、海の方角に逃げ出そうとする。でも大部分のサケは、子供達の股間をすり抜け、川上に向かってさらに登る。

「やあ、捕まえたぞ」

「俺だってほら」

「私は駄目、皆逃げて行ってしまうもの」

「よしよし、グリーンカにはこれをあげよう」

バルチクは本当に優しい。レナはまた思う。

—このひとでよかった。このひとでなければ、私は今、ここにいない！—

夕暮れが近付き、バルチクの一声で皆が帰路につく。ところがその途中だった。

「お父さん、あれなあに？」

グリーンカがバルチクに聞いている。それをよく見ると、全身針だらけのヤマアラシが低いネコヤナギの木の枝に腰掛け、じっとこちらを見下ろしている。

「あれはヤマアラシ、でも触ったり怒らしちゃ駄目よ。あの身体から沢山の痛い針が飛び出して、あなた達の顔や鼻に刺さるわよ」

「でも面白いじゃん。よし、俺が飛び付いてやる」

「止めなさい！」

でも悪ふざけばかり普段からしている牡のセルゲイの動きはもう止まらない。

「痛い！」

そのセルゲイが悲鳴を挙げる。

「痛いよう、お母さん」

その様子確かめながら、レナがバルチクを振り返る。するとその目に、

—もういい。助けてやりなさい—

というバルチクの心が浮かんで見える。

レナはセルゲイに近付く。それから右の前足で相手の首を強く押さえ付け、動きを止めてからヤマアラシのトゲを抜き始める。

声も涙もなく、セルゲイは泣いている。痛みに耐えかね、見動きもしない。

バルチクが笑って見守る。その横でふたりの子供がじっと見ている。

—これで懲りてくれればいいが—

バルチクもレナも、心の中で同じことを考える。しかし、それでセルゲイの乱暴が終わるとは思っていない。

—まだまだ、これからよね—

頭の中で、レナの呟きが聞こえるようだ。

悪い予感

11月の初め、カムチャッカは厳しい冬の到来を告げる時期となる。大地はいつも通り白一色、陸と海の境目が見えない。その分だけ、大地を動き回る動物にとっては、活動の世界が広がったともいえる。

日中の太陽はいつも南に傾き、直射日光を受けても、余り温もりが感じられない。それに、日中がとても短く、夜が長すぎる。

レナとバルチクの子供達はそれでも元気に育つ。産まれた時わずか500グラム前後だったのが、あれから6カ月後の今は、一番大きいセルゲイの体重が25キロを超え、一番小さいグリーンカですら20キロ程度はあるだろう。

子供達の母親レナの体重は今、30キロ。だから、セルゲイが隣に

並ぶと、さして変わらない。しかし、普段から暴れ者といわれるセルゲイでも、母親のレナの前では普通の子供。よく甘えるし、いうことも聞く。

つまりそれはセルゲイが典型的な母親っ子だということ。それに反して、少しセルゲイより体格が劣るユーラの方は常に落ち着きがあり、父親バルチクの言葉や動きをよく読む。そしてタイミングよく、バルチクを助ける父親っ子。

でも、牝同士の二人は仲がいい。それが時々、牝のグリンカを怒らせる。

—私だけ、仲間外れにしているの—

とはグリンカから母親レナに向かって言い付ける言葉。だが、レナはいつも笑うばかりで取り合ってくれない。

それもその筈。3頭が揃って遊び始めると、レナがすぐ痛い、痒いと文句を言い始め、最後は泣き出して母親の元に逃げ帰ってしまうのだ。

でも、グリンカには一つ特技がある。それは走るときのスピード。家族の中で一番早いレナが本気で走り出すと、それに付いて行けるのはグリンカだけ。あとふたりの男の子は、どれだけ頑張っても牝のふたりに追い付けない。そのときだけ、グリンカは自分が牝に産まれてよかったと思う。

早くも日が暮れて、バルチクの一家は北西の平原に向かう。視界の広がるその平原で、今夜の食糧を探そうというのだ。

バルチクが先頭にいる。両耳を大きく開き、鼻先を空に向かって伸ばしている。

その少し後ろにレナがいて、子供達がいる。皆大人しくバルチクの

様子を眺めている。乱暴者のセルゲイでさえ、こういう時は出しゃばらない。それは父親と母親から繰り返し躰けられたことだから。急にバルチクの様子が変わる。両耳が下がり、鼻がと目が真っ直ぐ先の闇を睨んでいる。

「レナ、これは確かなことじゃないが、ここから先5キロ辺りからひどい血の臭いがしてくる。血を流しているのはヘラジカのようなから、倒した相手はヒグマに違いない。」

「でもどうして、今頃。ヒグマは皆、冬眠中じゃないの？」

「普段なら、その通りだ。しかし自然界には常に例外があるもの。冬眠に失敗して冬に向かうヒグマだって、出ないとは限らないのさ」

「でもそうすると、これからどうなるの？」

「あれが冬眠できなかったヒグマなら、もう狂い始めているに違いない。だから、いずれは死ぬ。カムチャッカの長く厳しい冬を地上を歩いたままならヒグマは越せない。それがこれから問題になる」

「……………」

バルチクの全身を包んでいた緊張が解ける。両耳が普段の位置に戻り、尻尾からも力が抜けて下がっている。

「よし、ここから引き返す。お前達もオオカミだから、二日や三日食べなくとも死ぬことはない。今日の食事は諦めろ。じゃ、巣穴に戻るぞ」

バルチクはその言葉を最後に、身体の向きを変える。それからゆっくりと今来た道を引き返していく。

誰も文句は言わない。オオカミの子供にとって、父親は全体の存在。普段から父親はやはり怖い存在だが、一番信頼できる相手も父親を置いて他にない。

暗い、寒い。それに腹も少し減っている。でも、ここは大人しく父親バルチクの言葉に従う。

二度目の出産

再び訪れた春、レナは二度目の出産を迎えた。時期は5月初旬。産室は去年と同じ場所にある巣穴を使った。レナはこのとき3歳。心身共に、もう立派な牝のオオカミに成長していた。

二度目の出産は軽かった。まず一頭がポトンと生まれ、次から次に5分か10分間隔で5頭も産まれた。しかし、その中の1頭は死産で、レナにもバルチクにも手が出せなかった。

それでも今や、バルチクの一家は全員で9頭。このまますべて無事に育ってくれたら、見事な灰色オオカミの一家がカムチャッカの大地に誕生する。

そう思うと、レナは、

—ここにバルチクがいてくれたから—

という想いに囚われ、鼻の先に滴が溜まる。

6月、4頭の子供は無事に育っている。病気になる者も、生まれながらに虚弱な者もない。

7月、新たに産まれた4頭の子供を連れて、バルチクの旅に合流する。レナの心は爽やか。セルゲイやユーラが立派に育ち、グリンカの横顔に自分の顔が重なって見える。

「皆元気そうね」

「あら、お母さん。私達いつも元気よ。一寸セルゲイが煩いけどね」

「オイ、こら。グリンカ、お前そんなことを言っているのか。一昨

日、つまらないことで泣きべそをかいたのは一体誰だった」

「セルゲイの馬鹿、意地悪。オタンチン」

「これこれ、兄弟喧嘩は止めなさい。レナも子供達も元気そうでよかったよ」

「有難う、貴方」

今年産まれて二カ月になる子供達が兄や姉に飛び付く。それを巧くかわしながら、セルゲイやグリーンカが八方に逃げ出す。

それを楽しげに見守るレナとバルチク。すぐ脇に物静かなユーラの姿がある。

夕暮れ近く、バルチクとユーラとセルゲイが口に溢れるほどカリブーの肉を啜え、新たな巣穴へと移動する。丁度その頃、日没直前の光りが届き、レナの漆黒の毛を見事に照らす。

「わあ、お母さん綺麗！」

グリーンカが叫ぶ。それを耳にししながら、バルチクがレナの脇に歩み寄り、

「レナ、初めて生き返ったときのお前の姿が目浮かぶ」

と小声で言いながら微笑んでいる。

「そう、嬉しいわ。これもあれも、皆貴方のお蔭。愛してるわ！」
しかしそんなときでも、牡のセルゲイとユーラは振り向きもしない。それどころか、口からはみ出た肉に噛み付く幼い弟達を巧くかわしながら先へ進む。

今や先頭はセルゲイとユーラ。それに続くのが今年産まれた男の子。そしれ最後はバルチクとレナを囲む女の子達。母親のレナと同じように、幼い弟や妹を見るグリーンカの眼差しが優しい。

胸騒ぎ

9月、夜明けを目前にした時刻に、バルチクは目覚めた。周囲は皆まだ寝ている。

バルチクは起き上がる。それから背伸びを一つして、欠伸もする。

—これじゃ、少しだらしがないか—

と思いながら、もう一度周囲を見回す。大丈夫だ、誰も目を覚ましていない。

バルチクはそっと歩き出す。とくに意味もなく、目的があって動き出した訳ではない。ごく自然に足が動き、誰かに導かれるように北西に向かっている。

丘を越える。なにかがバルチクをさらに促す。その魔力に導かれ、バルチクはゆっくりだが先へ、先へと進んでいる。

バルチクの足が止まる。まだ明けきらぬ空に、うっすらと赤味が指すのが見える。

バルチクはそこで全神経を尖らす。耳を前方に開き、目は新月のように細めている。さらに彼の最大の武器、二つの穴を持つ鼻が空気の流れに沿ってなにかを探る。

バルチクはふと気を抜く。それから一息大きく大気を吸い込み、腹の中を絞り出すように、そいつを吐き出す。

そのとき、バルチクの鋭い鼻の粘膜になにかが引っ掛かる。きわめてわずかな刺激がその粘膜を通してバルチクに警告を与えているような気がする。

バルチクはまた歩き出す。方向は唯一つ。まだ彼にはなにか問題なのか分からない。分からないのに、それがある警告信号だ、という

誰かのささやきがまた聞こえている。

レナ達から離れて北西に30数キロ。わずかにあの時と同じ臭いが漂う。

—これは、レナが家族と倒れていた時の臭いにそっくりだ—

どうやら、バルチクはそこで問題の核心に近付いたようだ。

だが、とバルチクは考える。

—この臭いは二年前とほぼ9分9厘同じようだが、どこかもっと危険な臭いがする—

そう気付くと、バルチクも胸が高鳴る。一瞬全身の血が凍りつき、それがすぐ、怒涛の流れになって全身を駆け巡る。

—ともかく、まず帰ることだ。それから改めて考えよう—

バルチクはそこで身を翻す。スピードを上げ、一気に家族元へ戻って行く。

気が逸る。いつもの自分とは違う自分が今、カムチャッカの大地を駆けている。はっきりした理由もなく、バルチクは急ぐ。

—レナと子供達の顔が見たい！—

心の中でバルチクは叫ぶ、叫びながらまた走る。それはまさに、大森林火災に追われて逃げる動物達の姿にも似ている。

眠るバルチク

バルチクは疲れ切って家族の元に戻ってきた。その疲れは肉体より、精神の面で一層激しかった。

「貴方、どうしたの、・・・・・・・・！」

心配顔のレナが駆け寄った。

「うん、説明は後です。しばらく休ませてくれ」

バルチクはレナの言葉を遮った。そして身体を横倒したまま、目を閉じた。

子供達が集まってきた。しかし、レナが押しとどめ、小声で言った。

「さあ、静かに。お父さんは今疲れているのよ。寝かせてあげましょ。病気じゃないから、やがて元のバルチク父さんに戻って目を覚ますわよ。それまで皆、静かにしていてね」

レナの声は優しかった。でもその言葉は子供達の甘えを許さなかった。

バルチクは眠りながら、時々大きく息を吸い込んだ。

—バルチク、一体なにがあったの？ 今の貴方は普段と違う。とても苦しそう。私は貴方の心の中で生きてきたの。だから、分かるわ。貴方が今、とても苦しい立場にあることを。でも、貴方の苦しむ理由までは分からない。なにを見て、なにを知ったというの。貴方が再び目を覚ましたとき、私だけにはすべてを語ってください。貴方と共に、・・・・・・・・—

そう語り掛けながら、レナはバルチクの脇に座り、鼻先を伸ばして相手の閉じられた瞼に触れた。温もりは感じられなかった。でも、愛しいバルチクの匂いに胸が震え、心の底に不安の陰りが広がっていた。

時間がどんどん過ぎて行った。半月が空をかすめ、それがまた、西の山影に沈んでいった。そんな長くて重苦しい時間の中で、子供達も黙って座ったり浅く眠ったりしていた。

グリンカとまだ小さい子供達はレナの周りから離れようとしな
それに引き換え、セルゲイだけが時々何処かに姿を消す。でも、レ
ナはセルゲイを怒らない。

—あの子は、あの子なりに父親が心配なんだわ—

ひとり、ひとり性格が違って、子供達は皆レナの子供だった。時々
反抗するセルゲイにしても、レナは信じて疑わなかった。

—あの子はお父さんが大好きなの。そして母親の私を心から慕って
いるわ—

レナは時々、バルチクの顔を覗き込む。そうしながら、バルチクと
の出会いから今日までの出来事を思い出す。懐かしいと思い、愛し
いとも思う。

—決してこのバルチクと分かれなわ！—

そんな想いと言葉がレナの頭を駆け抜ける。

とうとう、バルチクが目覚めるときがきた。立ち上がり、重そうに
身体を揺する。脇にいるレナをじっと見つめ、それから辺りの子供
達の姿に目を向ける。

「皆揃っているな？」

「ハーイ」

直に応えるのは小さな4頭の子供達。そのいじらしい子オオカミの
声にバルチクが目が緩む。

—この子達は私の天使だ！—

バルチクの顔に微笑みが浮かぶ。

昨日戻ってきた方角に向きを変え、バルチクが目が遥か彼方を見守
る。それから一つ深呼吸をして、再び口を開く。

「しばらくお母さんを借りる。ふたりだけで語り合う時間が欲しい。

その間、皆仲良くしていなさい」

そう言うとバルチクは妻の目をまず見つめ、それから子供達も姿を見回す。

「・・・・・・・・？」

普段と違う父親の姿に、グリンカだけは胸に込み上げる不安が隠せない。すると、ユーラが厳しい目付きで口を開く。

「グリンカ、ここはお父さんの言葉に従おう。皆で海岸に降りて、しばらく一緒に遊ぶことにしよう」

珍しく自分の意見を口にしたユーラはもう、グリンカの返事さえ聞こうとしない。その替わり、小さい子供達とセルゲイを伴い、ユーラは真っ直ぐ海岸へつづく細い道を歩み始めた。

その様子を確認しながら、バルチクはレナを促して近くの岩場に登る。まだ昼間なのに、夕日のような太陽が南の空で淡く輝やく。

亡き父親からの伝言

レナはバルチクの後ろから岩場に登り、その隣に寄り添った。久し振りに、二人だけの時間が来た。バルチクはまたベーリング海を見詰めている。それに誘われ、レナも眼下の海を眺める。

バルチクが徐に口を開く。

「レナ、昨日大変なものを見てきた。それからお前達のところに戻り、こらえ切れずに眠ったようだ。その眠りの中で、亡き父の声を聞いていた。今からそれを君に話したい。聞いてくれるかな？」

そう言いながらバルチクはレナの目を見詰めた。

「いいわ、どうぞ聞かせてください」

レナは姿勢を正した。それからバルチクの目をじっと見た。

「じゃ、話は少し長くなるが、聞いて欲しい。その後で自分自身の言葉も伝える。じゃ、話すよ。この話は多分、私が2歳か2歳半のことだったと思う」

ある夕暮れどきだった。父のペベックが疲れた顔で戻ってきた。そこには母がいて、私もいたが、他の兄弟は皆死んでいなかった。少し疲れを癒してから、父は私を目の前に呼んで、次のような言葉を残した。それが父ペベックの残した最後の言葉だった。

バルチク、よく聞きなさい。カムチャッカの我々灰色オオカミはいつも群れで暮らす。群とはある時に小さな家族だったり、あるときは大家族だったりする。一番小さな家族は私達のようなものだ。そして最大になると、23頭もの大家族になるという。私にはそれだけ大きな群れを知る由もなかった。

ともかく、オオカミの群にはしっかりとした秩序がいる。体重500キロを超えるヘラジカにせよカリブーの大群にせよ、食料にする相手が余りにも大きいからだ。

オオカミの群を率いるのは牡だ。αメールとも呼ばれる大人になった牡だ。その役割は大きき。皆で狩りを始めるとき、休んだり眠ったりする場所の選択、群れが遠くに旅をするとき、すべてを決定するのはそのαメールの役割だ。

だからαメールには豊かな経験が必要になる。知恵もあり、気力や体力にも優れている必要がある。しかし、αメールにとって一番大事なのは、群れが危機に襲われたとき。

大抵、我々オオカミの群には小さな子供達がいる。だから間違っ

他のオオカミの群に出会ったとき、またはあの巨大で凶暴なヒグマに出会ってしまったとき、群れがただ逃げるだけでは逃げ切れない。そんなとき、大きな子供がいれば、戦うべき相手を巧く誘導し、最後はリーダーの α メールが相手の喉笛に噛み付いて噛み殺す。ただそこに、大きく育った子供がいなときは、 α フェメールと呼ばれる母親が息子達の代役を務める。

それには危険が伴う。どの戦いにも死の陰がつきまとう。しかもそこで死ぬのが母親なら、群れはやがて全滅する。そこでだ、バルチク。

もし無事に自分の群を救いたいなら、 α メールは単独で戦いを終わらさねばならない。相手を誘い、怒らせ、自分を餌にして追跡させる。そして群れから遠く離れた場所まで誘い出したら、最後は必至の戦いになる。

バルチク、そのとき決して相手に怯えるな。無事に勝つことだけを考えるな。命を的に相手と戦い、自分も倒される覚悟で相手を倒すのだ。

分かるか、バルチク。私の群を引き継ぐのは今こそ私だが、次はお前だ。それだからといって、自分が牡に産まれたことを悔やむな。何故なら、その戦いで仮に私やお前が死んでも、私達の血の流れは途絶えない。

その血の中で私達リーダーになっていたオオカミの魂が永遠に生き残る。残って長い、長いオオカミの歴史がつづくのだ。

いざというとき、オオカミの牡は身体を張れ。自分の命を的に群れを守れ。そしてもし、例えばお前に死が訪れても、それを悔やむな。怯えるな。

私は次の世界で待っている。そこにはお前と同じときに生まれながら先に死んでしまった兄弟や姉妹がいる。そして遙か昔に生きていた遠い祖先の方々も、立派に自分の群を守り切って死を迎えたお前を静かに微笑みながら見守っている。

バルチク、無駄に死ぬな・愚かに逃げるな。オオカミの牡に産まれた者にとって、最大の生き甲斐は群を守り切ること。それは生きる喜びであり、牡であることのかげがいのない魂の礎なのだ。

さあ、まだ静かに眠りなさい。そして今度目覚めたと、カムチャツカの牡オオカミとして生まれた宿命を喜びと誇りを持って果たしなさい。じゃ、お休み、我が息子バルチクよ。

そこまで話し終えたとき、バルチクの身体は感動に震え、目元に赤味がさしていた。いや、そのすぐ脇に激しく泣き崩れるレナの姿もあった。

愛しい子供達へ

バルチクの話は終わった。そのままバルチク自身も次の言葉が浮かばない。それは話を黙って聞いていたレナも同じ。しかもレナの場合、バルチクが何故今、父親の遺言のような言葉を自分に話してくれたのか。その点がどうも理解しかねる。

—あのね、バルチク、・・・・・・・・—

本当はその訳を早く聞きたい。でも、それが怖い。とても恐ろしい話が夫のバルチクから聞かされそうで、その勇気が湧いてこない。

—多分、これは、・・・・・・・・—

レナには悪い予感が頭に浮かぶ。バルチクとの永遠の別れが近付いたように思えるのだ。

—私の大切なあのひとは昨日、どこで何を見て来たのか。そのことと今聞いたバルチクの話が、どこでどう繋がるのか。私は知りたい—

レナの本心はそこに落ち着く。しかし、夫から真実を告げられたとき、自分が果たしてそれに耐えられるかといえば、そんな自信など何処にもない。

そんなレナの心の葛藤を知ってか知らずか、バルチクから落ち着いた声が掛かる。

「レナ、子供達をあの巣穴の周りまで集まるように言ってくれ」

「・・・・・・・・？」

レナは返事が口に出ない。心が騒ぐ。でも仕方なく、海岸で遊んでいる筈の子供達を呼びに出掛けて、どうにかバルチクの目の前に連れ戻す。

「これから話すことがある。静かにして、しっかり聞いて欲しい」

「ハイ」

元気な小さい子供達がそれに応えて飛んでくる。無邪気で可愛い。天使はやはり、この子供達の中にいる、とバルチクは胸を熱くして思っている。

「それじゃ、これから大事な話をする。ユーラ、グリンカ、そしてセルゲイ。私の言葉をしっかり胸に刻んで欲しい。そして、これからもっと、お母さんを助けてくれ」

その言葉にグリンカとセルゲイの顔が引きつる。なのに、ユーラの落ち着いた態度が不思議に見える。

「今から2年ほど前、ここから遙か北西の大地でお前達のお母さんレナが倒れていた。傍らに群れの仲間も累々と倒れており、地上に残っていた雪と氷の上に、沢山の血も流れていた。その時、レナは気を失っていたが、死んではいなかった。だから私はお前達のお母さんをここまで運び、静かに回復を待った。そうだったね、レナ」

「そうよ、だから私もここにいるし、お前達もここで暮らしているのよ」

「では話を先に進める。あれは二つのオオカミの群が戦った跡だった。どちらも仲間に死者が出たようだったが、レナの群が結局負けたのだ。レナは父親の身体に隠れて生き延びられたようだ。幸運だったのだろう」

そこでバルチクは一旦話を止め、つくづくレナを見詰めた。その目にレナが必死に縋り付く。

「さて、話はここから本題に入る。つまり、何故あのとき、あの場所で二つのオオカミの群が必死に戦ったのか。それが単なる偶然ならそれでいい。私もあのとき、二つの群が追い掛けていたカリブーの群があの大地上で偶然、重なってしまったと思っている。ところが、昨日のことだ、……」

バルチクはそこでまた口を閉ざした。両目を遙か彼方に向け、どこか遠くになにか探るような姿が見える。それを見て、レナがまた口を開く。

「貴方、どうしたの。なにか心配事でもあるの？」

「いや、いや、そこまで気を使わなくてもいい。ぼんやりとした不安に私の心がふと乱されただけだ。さあ、もう一度話を元に戻す。昨日、私は2年前と同じ光景にであったのだ。場所はレナのいた場

所から更に北西に向かったところ。正確な場所は今以って言葉にできない。しかし、私がある場所に深く入り込んで調べると、一つ妙なことが気になった。死体は死体でも、一部は見事に首を噛み切られて死んでいる。ところがその近くに、頭や背中や脚まで出鱈目に噛まれてから死んだヤツも沢山いるんだ。オオカミが冷静な戦いをするなら、必ず相手の首筋に噛み付いて倒そうとする。ところがもし、一部のオオカミが事前に狂犬病という恐ろしい伝染病に冒されているとしたら、そいつは気が狂ったように暴れ回り、手当たり次第に噛み回る。その相手はオオカミでなくてもいい。シカでもキツネでもなんでも構わないのだ。しかも問題はそこで終らない。噛まれた相手がまた狂犬病に掛かって、親でも兄弟姉妹でも噛み付きまわる。そして自分も死ぬことになるが、皆も殺すことになる。それはまさに地獄の世界。できることなら、その流れを止めて、このカムチャッカの大地に皆が安心して生きれる平和な世界を取り戻さなければならない」

そこでバルチクは大きく息を吸い込んだ。その目に戸惑いの陰も見える。

「それでどうなるの、お父さん？」

娘のグリンカが震えながらバルチクを見上げる。

「そこでだ、お父さんはこれからお母さんを連れてあの現場に戻る。そして3日以内に、お母さんのレナはここに戻ってくる。ただ私はもう、ここに戻ってくることはない。戻ってこられないのだ。そこで皆に頼みがある。グリンカはお母さんを助けて小さな子供達の面倒をみてくれ。ユーラとセルゲイはお父さんに代って群れを守るんだ。いいかい、ふたりとも」

「貴方、それはどういうことなの？」

「それはふたりだけになってから話すことにする。子供達には難しい話だから」

するとそこで、ユーラが珍しく口を開いた。

「お父さん、僕はあなたの言いたいことが分かるような気がします。でも悲しいですね、オオカミは。どうしてこんな悲しい運命を僕達は担うこととなるのですか？」

その言葉に一瞬、バルチクも驚き、つづいて落ち着いた姿に戻って話をつづけた。

「ユーラ、お前はいいことを言うね。お前が今口にしたことは間違っていない。ただ、一つだけ誤解がある。それはオオカミの牡が背負う宿命を悲しいとお前が言ったことだ。それだけは違う。例えばお父さんなら、子供達と妻という家族のためなら、喜んでこの身を捧げる。それは悲しみではなく、牡の魂を揺する喜び。私とお前、お前とまだ見ぬ孫の男の子。襷を次々に繋いで生きる。そこにこそ、本当の生きた証があるのだ。分かるか、ユーラ？」

「分かりません、今は。でもいつか、分かる日が付くような気がします」

「よし、ユーラ。それで十分答えになっている。私は嬉しいぞ、ユーラ。頼んだぞ、セルゲイも」

「.....」

セルゲイは答えない。しかし、その尻尾の先が小刻みに振れている。

「さあ、それじゃ。皆ここに寄っておいで。お父さんとお母さんを真ん中にして毛の塊になって今夜は眠ろう。いいね、レナ」

「勿論よ。さあ、小さい子も大きくなった子も一緒に来て頂戴。お

父さんの身体の温もりを皆で分けてもらいましょう」

山の頂へ

翌日の朝、バルチクはもう一度子供達を集めた。

「さて、もう一度言う。お前達のお母さんは3日にここに帰ってくる。しかし、私とお前達は今日、この時をもって一生の別れになる。ユーラ、セルゲイそしてグリンカ、3日間だけお前達で小さい子供達を守ってくれ。そしてお母さんが戻ってきたら、レナを助けて立派なオオカミの家族を作るんだ。いいな、3人とも、……………」
それに答える者はいなかった。だが、父親のバルチクに反発する者も出なかった。3人揃って下を向き、心に木霊するなにかを必死に抑えているように見えた。

「では、出掛ける。レナ、いいか？」

「ハイ、いつでも出掛ける用意はできています」

バルチクはゆっくりと歩き始めた。方角を何故か南西にとり、雲の彼方に浮かぶ未知の山々に向う方向に歩き出した。

全部で7頭の子供達がその後ろ姿を見守っている。しかしもう、バルチクは後ろを振り向かない。一本の線の上を歩くように、ひたすら真っ直ぐに歩き続ける。

その足跡を辿るように、レナも黙って歩き続ける。空は曇り、風が少しだけ北から南へ吹き抜ける。

「レナ、ふたりだけで歩くのは久し振りだな」

「ええ、そうよ。でもこんな悲しい旅になるとは皮肉なものね」

「まあ、それでもふたりだけの旅には違いない」

「バルチク、貴方それで今どこに行こうとしているの？」

「ほら、あの雲の中に見える一番高い山だ」

「そう、でもどうして今あの山に登るの？」

「その答えは後だ。山の頂に立った時に話すことにする」

夏の間いた小鳥たちの声が少なくなった。大地を様々な飾っていた草花も今は霜にやられて萎れている。でもまだ9月の終わり、あのブリザードが吹き荒れる真冬の始まりまでは今しばらく時間がある。

「レナ、少し聞いてもいいかな？」

「なにを聞きたいの」

「あの時生き返ってよかったのかな、レナは？」

「勿論よ。あのとき、家族と一緒に死んでも悔いはなかったわ。でもね、貴方という立派な牡オオカミに救ってもらったことが第一。そして二つ目は、あんな可愛い子供達に恵まれたこと。皆、嘘のよう。余りに幸せで、怖くなることもあったの。でも、神様は私に優しいだけではなかったのね」

それ片耳で聞きながら、バルチクの顔に微笑みが浮かぶ。彼はふと、亡き父親ペベクの姿を思い出す。

—あのひとも、笑顔を見せることが珍しかった。いつも怒っているような気がして、怖いと思ったことも度々あった。でも怖いのに優しい父親だったなあ—

バルチクはつくづくそう思う。それなのに何故か、母親リンカの姿が思い出せない。不思議だと思う。おかしい話だとも思う。でもやはり、母親の顔が見えてこない。

「ねえ、レナ。君は父親と母親のどちらに親しみを覚えていた？」

「そうね、やはり母親ですわ。とても優しくかったもの。甘えさせてくれたし、色んなことを毎日教えてくれたもの」

「そうかい、やはりなあ」

バルチクはひとりで頷く。そうしながら、オオカミの世界でも牡と牝の世界がまったく違うのだと、つくづく思う。だが、
—牡と牝は違うからこそ、相手に恋もするし、必要になるのだ—
と思わずにいられない。

歩き始めて約5時間。そこでようやく平地が終わる。その先はなだらかな坂道。それもやがて終わると、今度は急な山道が延々とつづく。

バルチクはブルーベリーやクランベリーなどが生える茨の場所を避け、裸の土と石が重なるガレ場を探しながら上に登る。

「レナ、私から離れないで。ふたりの間が広がると、私の足元から崩れ落ちる石や岩が君に当たる」

「分かった、少し待って。今、そこに行くから」

バルチクはその言葉を聞きながら、
—レナは多分、かつての娘時代に戻っている。いやもっと、私に近づいている。こうしてふたりでいるのが余程嬉しいのか、それとも、……？—

バルチクは今このとき、レナを力一杯抱き締めたい。抱き締めてキスをして、それからみくちゃにして、空の上に放り出したい。でもそれは止める。止める代わりに、たった一言声にする。

「レナ、出会えてよかった。有難う、本当に！」

レナはそれに答えない。ただ黙ってバルチクを見上げる顔に、至福の笑顔を浮かべている。

バルチクの遺言

山頂に立つふたりの前で朝日が冷たく南の空に浮かび上がる。それと同時に、何一つ遮るもののない世界でふたつの海が見える。

前方はオホーツク海、後方に懐かしいベーリング海。話には聞いていたが、バルチクにとっても初めての世界が目の前に広がる。

「素晴らしい眺めね！」

レナの声も弾んでいる。

バルチクは遙か南に連なるカムチャッカの山々に亡き父親ペベクの面影を探してみる。確かに、その雄大な景観の中に父親の幻が生々しく蘇る。

父は山間に細く延々とつづく川岸を歩いている。時に思わぬ速さで崖を登る。崖の上に上がると、父は視線を上げて周囲を見る。それからまた崖を駆け下り、何事もなかったように、河原を歩く。

思い返すと、父親ペベクの存在はバルチクにとって常に偉大だった。冷静で沈着。そしてあるときは果敢。バルチクはそこに唯一絶対のモデルを見ていた。

—あのような牡オオカミになりたい！—

何度そう思ったか知れない。

レナにはそれほどの父親を思い出せない。ただ、娘に優しくった父の思い出はある。そしてレナにとって一番大事なのは母親。記憶は千切れ、千切れとなっているが、それでも暖かくて安心のできる大きな暖炉を思わせる雰囲気の中に母親の姿が微笑んでいる。

「レナ」

隣に並ぶバルチクから声が掛かる。

「なに？」

レナは何気なく答えているが、とうとうその時がきたか、と心では呟く。

「今日はこれからこの頂を降りる。それから一気に北へ向かい、夕方には問題の平原に辿り着く。そこで君と最後の夜を過ごそう」

「何故、それが最後の夜になるの？」

口先ではさり気なく、レナはバルチクに聞いてみる。でも本当は夫の言葉も思いも、分かり過ぎるほど分かっている。

「私はあそこで恐ろしい伝声病に侵されたすべての死体を近くの狭い断崖の下に投げ込む。それが済んだとき、私も多分、オオカミを凶暴な生きものに変えてしまうその伝声病に侵されるだろう。」

「それで？」

レナはまた、素知らぬ顔で聞いてみる。

「万に一つ、私はその伝染病の呪いの手から逃れられるかもしれない。しかしもし、私が皆の待つあの巣穴に戻った後で発病したら、その先は地獄になる。だから、私はあそこですべての仕事が終わったら、自分も断崖の底に消えたいと思う」

「……………」

レナは答えられない。もう、バルチクに聞く言葉も浮かばない。半歩、バルチクに近付く。それからバルチクの首に自分の身体を預ける。

「レナ、酷いようだが、そこで君に頼みがある。私があそこで仕事を始めたら、君は急いで子供達の元に戻り、皆を連れて長くて遠い旅を始めて欲しい。移動する場所は今向こうに見えるオホーツ

ク海の沿岸。行き先はカムチャッカの最南端にあると言われるラポトカの岬。そこで多分、君の一生も終わるだろう。その前に私達の群のリーダーをユーラに譲っておきなさい。彼なら大丈夫だ。あの子には立派なオオカミのリーダーになる」

「私もそう思うわ。でも私がラポトカの岬で死を迎えるとしたら、どうすればいいの？」

レナはもう泣かない。覚悟はすでに済んでいる。でも、自分の屍がどうなるか、そのことだけに不安が残る。

「そう、ユーラやセルゲイに頼んで北向きの墓に埋めてもらいなさい。そうしたら、君はいつでも私の方を見ていただけるだろ。これは私の我儘かな？」

それを聞いてレナの顔に微笑みが浮かぶ。

「バルチク、私は自分のお墓なんてどうでもいいの。死ねば私は重力のない魂になって空を飛ぶの。そして貴方の元に飛んで行って、また新しい生活を始めるのよ。駄目、今度会うときはお婆さんになっていると思うけれど？」

バルチクはそれを聞いて笑っている。レナもまた、バルチクに首だけ預けて笑い出す。でもふたり揃って声は出さない。

「レナ、もう一つ頼みがある。君がユーラにすべてを委ねるとき、彼に伝えて欲しい。さらに南へ向かえと。海が凍り付く冬の間、幾つもの小さな島々を渡って歩けと。その先に蝦夷と呼ばれる大地があって、皆が安心して暮らせる世界があると」

「分かった。それは間違いなく皆に伝える。でも私、ラポトカの岬まで大丈夫かなあ？」

「それは大丈夫だ。私の身体がたとえ死んだとしても、私の魂は君

達家族と一緒になのだ。それにあのユーラこそ私の後継ぎにふさわしい。安心しなさい。そして自分の子供達を信頼し切るのだ」

「分かった、子供達を信頼するのね」

レナはバルチクに甘えている。その姿に、バルチクの胸にも無上の愛しさが込み上げてくる。

「レナ、・・・・！」

その声は誰にも聞こえない。

走馬燈

バルチクから言われていた別れの日、レナは夜明け前に目覚めた。すぐ横で、バルチクはまだ眠りの中にいる。

レナは立ち上がる。それから背中を伸ばし、一息だけ欠伸をする。背骨がしなやかに曲線を描き、まだ若いオオカミの牝の姿が満月の光りに影を作る。

レナは前を向いて歩き出す。その先に高さ30メートルの崖があり、その先端に立つと、大きな平原が現れる。

レナは眼下を眺める。静まり返った世界に生き物の気配も見当たらない。ただ、深々と静まり返る疎らな森林と草原の世界が地平線に向かって伸びている。

—とうとうここまで来たのね。そして今日、私は夫のバルチクと永遠に別れることになるのね！—

レナは大きく胸を広げ、冷たい空気を吸い込む。それをしばらく胸の中に留め、心の底に押し潰した自分の燃える感情の嵐の蓋をもう一度、しっかりと抑え込む。

やはり、そうしていてもレナの身体はわずかに震える。なにか叫びたいという衝動が喉元まで込み上げる。意味もなく、駆け出そうとする衝動も動いている。

前方を見詰めていた自分の頭をレナは下げる。下げながら、暖まった胸の中の空気を吐き出す。ふと、涙が両頬を濡らす。

瞼を閉じる。足元が揺らぐ。頭が濃霧の中を彷徨う。突然、過去の記憶が蘇る。

懐かしい両親の周りでレナは一緒に生まれた兄弟と遊び戯れている。誰かが駆け出し、レナがその後を追いつける。するとさらに後ろから、他の仲間が追いつけてくる。

レナは逃げる。逃げながら笑っている。自分が出した声やふざけた言葉が聞こえる。燦々と輝く太陽がレナの周りを照らしている。遠くから水の流れる音も聞こえる。

足元のコケに小さな花が咲いている。黄色が多く、白い花も可憐で美しい。それに黒ユリの花も処々に姿を現す。

それを見つけて、突然レナが止まる。そこに後から走り込んできた仲間がぶつかる。レナは悲鳴を挙げ、仲間は笑って転げまわる。

すると急に場面が変わる。見上げるとそこに見知らぬオオカミがいる。大きくてしっかりした身体付きの灰色オオカミ。眼が優しく微笑んでいる。

—僕はバルチク。どうにか助かったようだね—

—助かった？—

一瞬、レナはその言葉の意味が分からない。

首を少しだけ動かし、周囲を確かめる。すぐ傍にある出入り口から光が差し込んでいる。その中に見知らぬ牡オオカミの姿が見える。

でも何故か、恐ろしさも怖さも感じられない。
レナはそこにメシアを見た。その姿に救い主という言葉が重なる。
でもレナにはいつ、どこで何が起こったのか記憶にない。
—君の両親も兄弟も皆死んでいるよ—
それはどうやらレナも事実だと思う。でも頭の中はカラッポ。そこにあるのは、
—このひとに頼って生きよう—
という極めて単純な決断だけ。
レナは相手を見上げながら微笑む。すると、同じような表情が相手の顔にも浮かんでいる。
突然また場面が変わる。目の前に自分の産んだ乳飲み子がいる。グリンカとセルゲイとユーラがいる。張り切った自分の乳首にしがみ付く3頭の我が子。
愛しさが込み上げる。可愛らしい縫いぐるみが三つ。巣穴の入り口にバルチクの姿が見える。
—あなた、ほらこんなに可愛い子供達よ！—
そう語り掛けたいのに、声が出ない。

バルチクに別れを

振り向くと、すぐ後ろにバルチクがいる。やはり、顔にも身体にも緊張感が漂う。レナは夫の姿をじっと見詰める。両耳がぴんと空に向かい、長い尾がゆっくりと振れている。でも、バルチクの目は遙か彼方を漂い、すぐ目の前にいるレナを見ていない。
バルチクがレナの脇をすり抜け、眼下の大平原を見回す。左から右、

つまり西から東へ頭を動かし、数日前の自分の記憶を確かめているようだ。

「バルチク！」

レナは切ない。ここまですれば、もう我慢の限度を超えている。

—どうしても夫の決断を止めなければ！—

その声なき声にバルチクが振り向く。

「ああ、レナ。御免、うっかりしていたよ。お早う、私の愛しいレナ」

「駄目、そんな言葉で騙されない。やっぱり止めて。ここで貴方を失いたくない！」

レナがバルチクに飛び付く。首に噛み付き、口の脇にも噛み付く。そうしながら、崖の先端からバルチクを力一杯、引き戻そうとモガイテいる。

全身から力を抜いたバルチクの身体が引きずられる。半歩、一步、二歩。バルチクは逆らわない。片目を開け、妻の必死な姿に見入っている。

レナの息が上がる。肩を上下に動かし、口を開いて息を吐き出す。

「レナ！」

胸の中で大きく膨れあがったレナの思いが、本人の声を奪い去る。

「・・・・・・・・！」

レナの身体からも興奮が消えていく。首が垂れ、頭が重い。涙が両頬を伝って地上にポトポト落ちている。

「貴方、どうしても出掛けるの？」

バルチクは返事をしない。その代わりに、レナの首筋に鼻先で優しく触れている。

「済まないね、レナ。苦しい仕事を君に残して」

「バルチク、苦しいのは私より貴方よ。あんな可愛い子供達を残して、家族に別れを告げようとしている貴方の心はよく見えているの。でも、でもよ、バルチク。私は貴方と別れたくないの。これ、私の我儘？」

「いや、そうじゃない。私にだってまだ迷いはある。皆揃って家族一緒に別な世界へ逃げ出そうか、と今このときだって考える」

「そう、じゃさうしましょう！」

「だがね、・・・・・・・・」

それで問題が解決するとは思えない。それはレナも十分心得ている。頭の中で分かっている、胸の想いが邪魔をする。

無言のときが始まる。ふたりは動かない。力の抜けたふたりの身体が重なり、二つが一つになって支え合う。

ある一瞬がきた。ピクンとバルチクの身体に衝撃が走る。全身の毛を逆立て、バルチクの身体に力が漲る。

「レナ、それではこれでお別れだ。もう一度言う。済まないが、私の魂を受け継ぐ子供達をよろしく頼む。君の旅のゴールはラポトカ岬。そしてユーラ達のゴールは海を越えた遥か彼方の蝦夷地。君の辿るコースはオホーツク海。彼等子供達が自力で乗り越える世界は千島列島（クリル諸島）。じゃ、レナ。もう一度顔を上げて君の顔を見せて欲しい」

でも、レナはその頼みを聞けない。頭先从から足の先まで、すっかり重い鉛に変わり、最後の叫びすら声に出せない。

ふと、バルチクの身体がレナから離れる。凛々しいオオカミの姿に秋の太陽が降り注ぐ。

懐かしい灰色の毛が、風に靡く。倒れた木を飛び越え、岩の隙間を縫って崖を下る。宿命をしっかりと胸に秘めた牡オオカミが平原の端に降り立つ。

そこで牡オオカミが振り向く。崖の上に目をやり、呟くように一言口にする。

「レナ、私は君がいつか来る日を待っている」

平原の中央に向かって、夫の姿が消えようとしている。それをじっと両目で追いながら、レナも最後の言葉を残して子供達の元へと戻って行く。

—バルチク、貴方はこれから私の胸で生きるのよ。決して離れず、決して死を迎えることのない世界で、私達は生きるの。じゃね、バルチク。今しばらくさようなら—

